

文化人類学と情報の整理法

みなさんは文化人類学という学問分野があるのを知っていますか？「未開社会」とかつては呼ばれた、文明化されていないアジアやアフリカなどの部族社会でしばらく生活をして、その人々の生活や考え方を記録に残す「フィールドワーク」という方法で研究する学問です。

私の大学での文化人類学の先生は、川喜田二郎という方でした。川喜田先生は、京都大学の出身で、京都大学には今西錦司さんがつくった霊長類研究所があり、そこから梅棹忠夫さんなど有名な学者がたくさん出ました。川喜田先生もその一人です。1970年に大阪で万国博覧会が開催された跡地に、「国立民族学博物館」が建設されましたが、梅棹忠夫さんはその初代館長として、資料の収集や展示に尽力しました。その中には川喜田先生が世界各地を歩いて集めたものも含まれています。

川喜田先生は、フィールドワークを繰り返した方らしい日焼けした顔で、文化人類学の基礎を淡々と講義されました。未開社会の人々の親族関係（血縁関係）の構造や道具の使い方などは、よくみると文明社会と共通するようなどころがあり、私のそれまでの思い込みを覆されることがよくありました。前回紹介した私の恩師の話とどこかつながるところがありますね。

さて、この川喜田先生ですが、実は文化人類学者としてだけでなく、あることでとても有名な方なのです。

みなさんはグループワークをするときに、あるテーマや課題について、「付せん（ポストイットの商標名が有名ですが）」に自分の考えを書いてどんどん貼っていき、しばらくしてから全体で、共通するものや対立するもの、原因と結果の関係にあるものなどをグループ分けしていく作業をしたことはありませんか？

そのような作業の進め方の最も古典的な手法として「KJ法」というのがあります。KJとはKawakita Jiroからとったものです。そう、KJ法は川喜田先生が考案したグループワークの手法なんですね。先生は、フィールドワークで集めたたくさんの情報をまとめ、そこから特徴を浮き出させるために、この方法を編み出したそうです。

文化人類学では「野生の思考」などという言葉がときに使われますが、自分たちと異なる社会や文化を理解するときには、データを並べ替えたり裏返したりすることを繰り返すことが必要です。思い込みを正したり、他人との意見の相違の中にヒントをみつけたりすることにより、異文化の理解が深まることが、文化人類学の目標です。

その後、KJ法は文化人類学の分野だけでなく、企業や大学で様々なプロジェクトを推進するための道具として、あたりまえに使われるようになりました。みなさんも、それとは知らずに活用したことがあると思います。興味を持った人は、川喜田二郎「発想法」「続・発想法」（中公新書）を読んでみてください。

新型コロナウイルスの感染拡大に関連して、デマや誹謗中傷の拡散、風評被害などの人権侵害が問題になっています。こんな時だからこそ、情報を整理して冷静に判断することが大切です。